九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

唐代における動詞「話」の成立

西山，猛
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/5464

出版情報：言語文化論究. 16, pp.117-123, 2002-07-12. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

唐代における動詞「話」の成立

西　山　　猛

0.

我々が中国各時代の文字化された文献を閲読してゆく際には，ごく基本的な語彙については「古代漢語」あるいは「現代漢語」のそれぞれ整備された辞書を参照して意味を決定してゆくのが一般的である。

例えば「先秦思想」に関する文献を閲読するのであれば，「古代漢語」の語彙を収録した辞書を参照して意味を定める。『論語』を具体例として挙げる。

有朋自遠方來，不亦樂乎？（『論語』學而）
（遠くから来る友人がいるということはなんと楽しいことだろうか？）

ここでは「有」「朋」等の語彙を『漢語大詞典』で調べることにより「いる」「友人」等といった意味が決定される。

また例えば「現代小説」を閲読する際には，「現代漢語」に関する語彙を収録した辞書を参照することになる。具体例として老舎『駱駝祥子』を挙げる。

我們所要介紹的是祥子，不是駱駝，（『駱駝祥子』第１回）
（我々が紹介したいのは祥子であって，ラクダではない，）

ここでは「我們」「介紹」等の語彙を『現代漢語詞典』で調べることにより「我々」「紹介する」等という意味が定まる。

ただこういった「歴史文献」の中には「虚詞」を始めとして一般の辞書には掲載されていないものがある。例えば『祖堂集』の以下の例をご覧いただきたい。

阿那个是汝心？（『祖堂集』巻５大顛和尚）
（どれがお前の心か？）

ここの「阿那个」という語彙は上掲の『漢語大詞典』には収録されていない。こういった語彙は例えば『唐五代語言詞典』などを調べて初めて正しい理解を得ることになる[1)]。

このような「歴史文献」中の特殊語彙の存在は漢魏六朝の「中古漢語」や唐末五代から宋元の「早期白話」に顕著である[2)]。こういった語彙は単に辞典類を調べることによって

意味が明らかになることも多いが，場合によってはこれだけでは不十分なこともある。

今回とりあげる動詞としての「話」の場合もそれにあたる。この語彙も後の中国古典の書面語の規範となる「文言」や，後の口頭語の規範となる「官話」に継承されなかったために，広範には受け入れられなかったのである。現在では一部の「漢語方言」にこの語彙は受け継がれているに過ぎない。

本稿ではこの語彙「話」に焦点をあて，特にこの語彙がどうやって動詞として成立していったかを中心に論じてみることにしたい。

1.

それではまず「話」という語彙から一旦離れ，「文言」や「官話」において一般的にどういう語彙が「いう」「かたる」という意味で使われていたかをごく簡単に示してみたい。

後の「文言」のもとになったものは『論語』を始めとする「上古漢語」である。そこでまず今一度『論語』を例に語彙を取り上げてみる。

『論語』で「いう」「かたる」にあたる語彙には「言」がある。

吾與回言終日，不違如愚。(『論語』爲政)
(私は顔回と終日話をしても，彼はまるで愚かであるかのように違ったことは言わない。)

その他には引用を導く「曰」がある。

子曰：學而時習之，不亦説乎？(『論語』學而)
(先生は言った：学んで時々にそれを習うことは，なんと悦ばしいことだろうか？)

その他「云」なども同様の語彙である。このように「文言」の「いう」「かたる」にあたる語彙は「言」「曰」などが一般的であったと言えるだろう。

それに対して一方，明清の口頭語の規範となった「官話」を支えていたものは「白話小説」などの「明清白話」である。ここでは『西遊記』を例に挙げる。

「白話小説」で「いう」「かたる」にあたる語彙は一般には「説」である。

據你説起來，乃是一個行孝的君子，向後必有好處。(『西遊記』第1回)
(お話に拠りますと，そちらは孝行息子でいらっしゃいますので，この先きっとよいことがございます。)

それから「白話小説」では引用を導くものとして「道」がよく使われる。

衆猴拍手稱揚道：好水，好水！(『西遊記』第1回)
(サル達は手を叩きながら褒め称えて言った：素敵な水，素敵な水！)

このように「明清白話」では「説」「道」などの語彙を一般に用い，その後の「現代漢語」では「道」の方はだんだん使われなくなっていく傾向にあるようである。

その他「現代漢語方言」では，一般には「説」を用いるようであるが，一部の「官話」「閩語」などでは「講」を，そして「広東語」などでは「講」の他に本稿で論じる「話」という語彙を今でも用いるようである。

以上ごく簡略に「いう」という意味の語彙を見てきたが，このように「話」という語彙は一般的ではなく，「言」や「説」などの語彙が一般的であったことがわかると思う。

2.

それでは次に「話」という語彙に戻って，「歴史文献」における中国各時代の「話」の用法を，まず唐より前の時代の文献から選んで見てみることにする。ここでは特に「動詞」だけでなく，「名詞」の用法も同時に見てゆきたい。

まず太古漢語においては，甲骨文金文においては用例はなく，『詩經』に3つ，『書經』に2つの用例を見出すことができる。『詩經』の例を以下に一つ挙げる。

其維哲人，告之話言，順徳之行。(『詩經』大雅抑)
(哲人であれば，よいことを語り，素晴らしい徳を行う。)

ここの句が毛伝で「哲人に善言を告げる」と解釈されて以来，「話言」は典故を踏まえた表現として「善言」或いは「言」の例として用いられるようになった。ここはすべて「名詞」の例である。

次に『書經』の例を一つ挙げる。

乃話民之弗率，誕告用亶其有衆。(『書經』盤庚中)
(即ち命令に従わない人々に語りかけ，真心から人々に語りかけた。)

この『書經』の例は確かに「かたる」というように動詞「話」の用例と解釈することが可能である。しかし後述のようにその後の上古或いは中古漢語に動詞「話」という語彙が見出せないのである。このことを踏まえてみればこの『書經』の用例は太古漢語，特に『書經』に特有のものと考えた方がよさそうである。

次に上古漢語の例として『論語』『孟子』『史記』を検索してみたが，1例も見出すことができなかった。このことから上古漢語においては「話」という語彙は用いられなかったと言える。

次に中古漢語の例としてまず詩の用例を見てみた。すると全三国詩に1例，全晋詩に7例ほどの使用を見たが，すべて「ことば」という名詞の例であった。

その他文として『論衡』『搜神記』といった文献を見てみたが，いずれも用例は見出せなかった。ただ『世説新語』には8例あり，そのうち2例は「話をする」という動詞の例である。例を一つ挙げる。

撫軍與之話言，咨嗟稱善曰：(『世説新語』文学)
(簡文帝は張憑と話をし，感嘆しほめたたえて言った：)

ここの「話言」は動詞であることは明らかで，そういった意味で確かにこの例は動詞「話」の原形と解釈できるのかも知れない。しかし古代漢語では名詞を動詞のように「名詞＋する」と用いるいわゆる「品詞活用」が行われていたのは周知の事実である。この『世説新語』の例も「話言」で「話をする」という意味であって，後述する唐代以降の動詞「話」とは起源を同じくするものではおそらくないであろう。

以上を総じて言えば唐代より前の文献には動詞としての「話」の用例はないと考えてよいと思われる。

3.

それでは次に唐代における動詞としての「話」の用例を見てみることにしたい。

まず詩として『全唐詩』を検索してみた。するとたいへん興味深い結果が出たので以下そのことを述べる。

動詞としての「話」の用例は初唐の詩人には見出すことはできないが，盛唐の最も早い用例の一つとして，広東の張九齢（678～740）の詩を2例挙げることができる[3)]。その1例を挙げれば以下の通りである。

城南隅，山池春中，田袁二公，盛稱其美。夏首獲賞，果會夙言。故有此詠
且言臨海郡，兼話武陵溪。(『全唐詩』巻49，p.605)
(一方で臨海郡のことを語り，兼ねて武陵渓のことを語る。)

張九齢はもともと嶺南の出身であるので，こういった用例は当時の南方の口語の反映と見るべきかも知れない。しかしいずれにせよ新しい用法であることには違いない。その他いずれも南方であるが，湖北の孟浩然（689～740）に2例，四川の李白（701～762）に4例を見出すことができる。

次に注目すべきは洛陽の杜甫（712～770）の詩に見られる12例である。以下の例をご覧いただきたい。

贈李八秘書別三十韻
莫話清溪髪，蕭蕭白映梳。(『全唐詩』巻230，p.2515)
(清渓の髪のことを話してはいけない，それは蕭々と白く映えて梳っている。)

杜甫の詩にこういった例が多いのはその現存する詩の収録数が多いこともその要因の一つではあるが，この中原出身の杜甫において動詞としての「話」の用例が多いのはおそらくそれだけではあるまい。おそらく杜甫はこの動詞としての「話」という表現を，「新奇な俗語としての表現」として意識的に用いたのではないだろうか。杜甫の出現以降中原に限らずすべての地域の詩人たちにこの「新奇な俗語としての表現」は流行してゆくことにな

るのである。

その後中唐に入ると江蘇の戴叔倫（732～739）に7例，西安の韋応物（737?～791）に4例，甘粛の権徳輿（759～818）に4例，洛陽の劉禹錫（772～842）に5例と，各地に用例が見出せる。

陝西の白居易（772～846）の詩における13例も注目すべきである。その1つを挙げれば以下の通りである。

梨園弟子
白頭垂涙話梨園，五十年前雨露恩。（『全唐詩』巻442，p.4946）
（白頭の者は涙を流して梨園のことを語る，五十年前の雨露の恩を。）

もちろん白居易の詩に動詞「話」の用例が多いのも，その現存する詩の収録数が多いことがその要因の一つに考えられるけれども，そこにはやはり俗語としての表現として意識的に動詞「話」を用いたからこそであったであろうと私は思う。

その他洛陽の元稹（779～831）の6例，河北の張祜（779～831）の7例，河北の賈島（779～843）の10例，そして晩唐になると西安の杜牧（803～852）の8例，河南の李商隠（812?～858）の3例等々，多くの詩人からその用例を見出すことができる。そしてその傾向は宋詞へと引き継がれていくことになる。

4.

唐代の文については5つほどの用例を『舊唐書』から見出すことができるが，それは詩ほど明確なものとは言えない。このことは，動詞「話」は詩や会話の文において当時の俗語として流行していたことを物語るが，一般的な文章においては浸透しなかったことをもう一方では示しているのではないかと思う。

では唐代の詩において出現したこの動詞「話」の用法はそれ以降どのように変遷していったかを以下簡単に述べたい。

唐詩の後を継いだ宋詞ではなお多くの用例を見出すことができる。まず福州の柳永（990?～1050?）に4例見出すことができる。以下に1例を挙げる。

玉蝴蝶
未同歡，寸心暗許，欲話別，牽手重携。（『全宋詞』p.40）
（共に歓ばずとも，心では密かに許し，別れを語ろうとして，手を取り共に重ねる。）

その他江西の晏幾道（1030?～1106?）に4例，河南の賀鑄（1052～1125）に6例，山東の辛棄疾（1140～1207）に3例，浙江の呉文英（1200～1260）に5例ほど見出すことができる。こういった用法から見てこの動詞の「話」の用法は宋代へ継続されていったことがわかるが，ただ宋詞のこれらの用例は唐詩のものと比べて「話別」「莫話」などの「常套化された表現」に収斂されていったようである。そしてその傾向は後の散曲などにおいても同じである。

次に語録や詩話などの早期白話については五代南唐の『祖堂集』において10例ほどを得たが，その後の『大唐三蔵取経詩話』や『三国志平話』にはほとんど用例は見られない[4)]。

その後の明清白話においても用例は見られないが，ただ南方方言が反映された文献においてその用例を見出すことが出来るようになる。例えば呉語が反映された呉歌などの文献がそれである。そしてその現象は現代の広東語などの方言文学へと継承されているのである。

5.

我々は歴史文献において語彙の調査や詩文の注釈を行う際，「当時の口語が反映されたもの」であるとか「俗語が自然に広まっていったもの」であるとかの表現を安易に使う傾向にあるが，実際の状況はそんなに簡単なものではない。今回の動詞「話」にしても最初は確かに唐詩において「その当時の口語が反映されたもの」であったかも知れない。しかしある時期明確に「俗語としての新奇な表現」として唐代詩人間において意識的に流行していったものであり，それはその後の宋詞へと引き継がれていったのである。そしてその宋詞においても後には徐々に「常套化された表現」となってしまい，結局は「官話」の正当な地位を占めることは一度もなかったのである。そして現在ではごく一部の「方言」にその語彙は生き続けているということになるのである。 (2002年4月)

注釈

1） この事象については既に孫錫信1992，p.78に指摘がある。

2） 漢語の時期区分について私はおおまかに以下のように考えている。

商から西周……太古漢語
春秋戦国から前漢……上古漢語
後漢から魏晋南北朝……中古漢語……以上古代漢語
唐五代から宋元……早期白話
明から清……明清白話……以上近代漢語
民国から現在……以上現代漢語

3） 唐代詩人と宋代詞人の出身地と生卒年については植木他1999を参考にした。

4） 唐末五代においてもう一つ忘れてはならない文献として敦煌変文が挙げられる。私は『敦煌変文集』における動詞「話」の例として1例を得ただけであった。

只徒來問疾，意要話其因。(『敦煌変文集』巻5維摩詰經講經文)
(ただひたすらに疾を問う，その意図は原因を語るにある。)

ただこの文献については全文を検索したわけではない。ちなみに『敦煌変文字義通

釋』『敦煌文献語言詞典』には動詞「話」についての項目はない。

なお動詞「話」の項目があるものとしては前掲の『唐五代語言詞典』があるが，そこには杜甫や鄭谷の詩が挙げてあるのみである。なおこの文献では『祖堂集』を用例として動詞「話會」を項目として立ててあるが，この語彙は後の時代に受け継がれることはなかったようである。

参考文献

『論語正義』劉宝楠撰（中華書局十三経清人注疏1990年本）
『漢語大詞典』漢語大詞典編纂処編纂（漢語大詞典出版社1986～1994年）
『駱駝祥子』老舎著（人民文学出版社1955年本）
『現代漢語詞典（修訂本）』中国社会科学院語言研究所詞典編集室編
（商務印書館1996年本）
『祖堂集』静筠二禅徳合編（日本禅文化研究所1994年本）
『唐五代語言詞典』江藍生曹広順編著（上海教育出版社1997年）
『漢語歴史語法要略』孫錫信著（復旦大学出版社1992年）
『西遊記』（上海古籍出版社李卓吾評本1994年）
『毛詩正義』孔穎達正義（北京大学出版社2000年本）
『尚書正義』孔穎達正義（北京大学出版社2000年本）
『世説新語校箋』徐震堮著（中華書局1984年）
『全唐詩』（中華書局1960年本）
『全宋詞』唐圭璋編（中華書局1965年）
『漢詩の事典』植木久行他著（大修館書店1999年）
『敦煌変文集』王重民他編（人民文学出版社1957年）
『敦煌変文字義通釋（増補定本）』蔣禮鴻著（上海古籍出版社1997年）
『敦煌文献語言詞典』蔣禮鴻主編（杭州大学出版社1994年）